

降圧薬の服用で正常血圧であっても心臓血管病死のリスクは高い～日本の研究から

血圧と心臓血管病による死亡リスクの関連と、降圧薬の服用によりその関連に変化がみられるかについて、日本人を対象とした大規模研究のデータを用いて検討した。

日本人の生活習慣とがんとの関連を調査する大規模コホート研究(JACC 研究)のデータより、登録時(1988~1990年)において、脳卒中や冠動脈疾患、がん、腎臓病の既往のない40~79歳の男女27,728例を対象とした。2018年のヨーロッパの高血圧ガイドラインに基づき、対象者を健診時の血圧値により5つの群に分けて心臓血管病による死亡率を比較した。その結果、正常高値群(130-139/85-89mmHg)と比べた心臓血管病による死亡リスクは、至適血圧群(120/80mmHg未満)では0.85倍、正常血圧群(120-129/80-84mmHg)では0.96倍、I度高血圧群(140-159/90-99mmHg)では1.26倍、II~III度高血圧群(160/100mmHg以上)では1.55倍であった。このように、血圧の上昇とともにリスクが高まる傾向は、降圧薬を服用していない人にみられた。降圧薬を服用している人では、正常高値群と比べた心臓血管病による死亡リスクはU字型の関連を示し、至適血圧群では2.31倍、正常血圧群では1.68倍、I度高血圧群では1.56倍、II~III度高血圧群では1.63倍であった。

今回の結果から、日本人の一般集団において、降圧薬の服用により血圧が至適血圧または正常血圧に管理されていても、心臓血管病により死亡するリスクは依然として高く、そういった患者のリスク管理に注意が必要であることが示唆された。

出典:Journal of Hypertension. 2019 Mar 14. doi: 10.1097/HJH.0000000000002073.